概　要　報　告

実施期日	８月３日(水)【午後】
部　会　名	小学校　総則部会

神奈川県研究主題

カリキュラム・マネジメントによる学校教育の改善・充実

テーマ

思いを『つなぐ』　人と『つながる』～国語科における話し合い活動を通して～

提案概要

提案者の勤務校の研究を中心に、どのようにテーマを達成していったか、提案を行った。

【研究１年目】

「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業作り。６年間で育てたい子どもの姿を＜授業の中で自ら発言することによって、自己と他者をつなごうとする子ども＞とした。研究２年目に向けて、複数の教科にまたがっていた研究については、教科を国語に統一し、各学年に成果を反映させやすくした。話合い活動を中心として、研究を行った。

【研究２年目】『つなぐ・つながる』～国語科における話し合い活動を通して～

① 授業の中で自ら発言することによって、自己と他者をつなごうとする子ども
② 子どもと授業をつなぐ（カリキュラム・マネジメント）
③ 子どもと教育課程（行事）をつなぐ

最後には、それら３つがつながり、中学校・社会へと繋ぐ力を育てられるよう「つなぐ・つながる」をテーマとした。

【研究３年目】

２年間、実践してきた研究の明確化を図るために、研究構想図にまとめ、実践の成果と今後の方向性について確認していった。

研究のポイントとしては、① 「つなぐ・つながる」のもつ意味が広いのでわかりやすくしていく。② 思いを『つなぐ』・人と『つながる』としていくことで、子どもたちにつけたい力をイメージしやすくして、かつそうした姿勢を育てていくことを目指す研究とした。

研究を進めるにあたって、「聴き方・話し方」ステップアップシートを利用した。学習のまとめに「学習目標・振り返りシート」の活用を行った。この二つのシートは手立てとして有効であった。

また、研究実践してきたことを研究構想図にまとめ、実践の成果と今後の方向を確認しながら研究を行った。

質疑応答

◎ グループ協議の後、各グループ発表を行ったので質疑応答はなし。

協議の柱及び協議概要

私は、○○を通じて「思いを『つなぎ』、人と『つなげています』」として、○○の中に当てはまる部分を各個人で考えてもらい、グループ討議をした。

グループ数が多かったため、協議後３グループが発表を行った。

＜グループ① ＞

思考ツールを通じて、子どもたちの考えを見える化してつなぐ。話せない子、話せる子、全ての

子の意見を見ることができる。思考ツールを利用することで、話せない子の頭の中を見ることができる。
GIGAスクール構想でICT機器が入ってきているので、機器の利用を通じて様々な子どもたちの考えをつなげていきたい。
　教室環境づくりを通して、子どもたちをつなげていく。いい言葉、悪い言葉を言わないようにしよう。自分から発表する場を意識的に作っていく。さまざまな教科で指名無しで発表すると言えていない子も発表できるように慣れてくる。
　ステップアップシートを使って子どもたちの様子が見える化しているのが素晴らしい。日々の授業の中で行うのは大変ではないか。

＜グループ② ＞

　算数の時間、一人が答えを発表するときに、全てを言わせずに次の子を指名して発表をつなげる。
　一度発表を聞いたら、「今の考えもう一度説明してくれる子？」と、誰かが発表したことに対して他の子につなげる。授業者が意識して答えが色々とあるもの、一つしかないものなどいろいろな問題を出すようにする。
　話し合いたくなる課題設定が大事。安心して話し合える環境や準備ができているといい。鑑賞の授業では、音楽に出てくる人物の様子を先に吹き出しに書かせて次に生かすように準備をした。

＜グループ③ ＞

　二点に分けて話し合いを行った。「ｏｏを通じて」のｏの中身。言葉だったり授業だったり授業の工夫や、さまざまな工夫という言葉が出た。また、各学校の教務、カリキュラムの話になった。カリキュラム・マネジメントを行う際に工夫、困っていること、適切に人員配置など、教務としての工夫、変更点などがあれば教えてほしい。

★ 他のグループでは、ICT機器を利用することで、子どもたち同士の意見がつなぎやすくなったという意見も多く見られた。

まとめ概要

　先生方から自然発生したリレー方式で授業を見合うこと、また研究協議の方法が印象に残っている。大規模校としての研究の工夫が見られた。研究協議をしたその日に協議を済ませて、別のクラスでその課題が解消されている。特に計画されたものではなく、自然発生的に出てきた授業作りである。
　この取組が提案の小学校の先生方の授業力向上につながっていった。まずは自分たちで話し合う姿を見せてもらった。教師同士の充実が子どもたちの教育活動の充実につながった。

　研究は、さまざまな手立てや成果があった。同小学校として６年間どのような子に育てたいか明確にしていたことも一因だと思う。大規模校でありながら、教職員全員で団結して取り組んでいる。大人数の教職員が団結して取り組んでいる要因は、子どもたちの変容が源になっているのではないか。

　地域の実態。子どもの実態。学校としてどのような子どもたちに育てたいのか？　カリキュラム・マネジメントを達成するために以下の三つのポイントを例示した。

１　教科横断的な視点で学校の目標を達成できるようにする。
２　子どもたちの実態や地域の様子　データを集め、PDCAサイクルを行うよう努力する。
３　教育内容と教育活動を効果的につなげていくようにする。

今後も、研究構想図、ステップアップシート、教員同士のリレー方式などの継続を期待している。

概　要　報　告

実施期日	８月４日(木)
部　会　名	小学校　国語部会

神奈川県研究主題

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

テーマ

『表現することを楽しむ子をめざして～伝え合う力を高める授業づくり～』

提案概要

提案設定の理由

「伝え合う」ことについては、個人差も大きく、自分の思いを伝えたり表現したりすることが苦手な児童もいると考える。所属校での「表現することを楽しむ子をめざして」という校内研究のテーマに加え、鎌倉市学校教育研究会国語部会での「伝え合う力を高める授業づくり」についての研究をふまえて、テーマを設定した。１、２年生では、安心して伝え合える環境作り、友だちに「伝えたい」「意見をもらいたい」という意欲的な態度を育んできた。３年生では、「３年とうげ」の公開授業をベースにして、それまでの学びを生かし、その後の子どもの変容についても見取れるように「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」をテーマに年間を通して取り組んだ。

学習指導要領との関わり

＜２学期　三年とうげ＞

〔知識及び技能〕

（１）　オ　様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増やし、話や文章の中で使うとともに、言葉には性質や役割による語句のまとまりがあることを理解し、語彙を豊かにすること。

〔思考力、判断力、表現力等〕

C　読むこと

（１）イ　登場人物の行動や気持ちなどについて、叙述を基に捉えること。

エ　登場人物の気持ちの変化や性格、背景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像すること。

（２）イ　詩や物語などを読み、内容を説明したり、考えたことなどを伝え合ったりする活動。

実践内容

これまで、「自分が思ったこと・考えたことには、必ず理由を書く」ことについて指導をしてきた。このことを生かし、自分なりに工夫して自分の思いや考えを伝えられるようになるということを意識し、「三年とうげ」の単元計画を立てた。まずは、「三年とうげ」の面白さを伝え合い、ずれや共通点などを楽しんだ。民話や昔話の面白さや良さ、共通性などを視覚的に捉えるために、「展開」「人物」「表現」に分類し、見つけたものに色付せんを貼って読み進めるようにした。「三年とうげ」を学習した後、児童が面白いと思った民話や昔話について、理由を述べながら紹介した。同じ話を選んでも、面白いと感じる点が違うということに気付かせた。また、児童に好きな本を選ばせるために、図書館専門員と連携し、本の種類と冊数を十分に確保するように努めた。選んだ本に付せんを貼って読み進め、紹介し、その発表を聞くことで、他の本にも興味を持つことができた。自分が面白いと感じたワンフレーズをクイズ形式で紹介したり、発表の中で「展開」「人物」「表現」のどこに着目したかを伝えたりするなど発表の仕方を工夫した。

成果と課題

「展開」「人物」「表現」に着目して、教科書の物語を読んだり、民話や昔話を読んだりすることで、内容理解や場面の様子、人物の行動や気持ちの変化に気付き、考えたりすることができた。また、お互いに考えたことや感じたことは、理由を付けながら表現し、交流をすることで、友だちとの感じ方の違いや、似たような考えでも理由が違うことに気付くことができた。書くことに関しては、はじめは、何

を書くのかを具体的に指示をしたワークシートを使用することで、書くことが苦手な児童でも簡単な言葉で書くことができた。その後の単元では、あえて枠を使わずに自由に書かせた。子どもたちは、目立たせたいところを大きくしてみたり、挿絵を描いたり、工夫をしてまとめることができた。研究テーマになっていた「表現することを楽しむ」については、身に付けることができたのではないかと考える。課題としては、話者がどの視点で話をしているのかということを比較・分類しながら聞くという点である。「伝え合う」ことは、発信者と受信者双方の力が必要である。受信者側の聞く力についても、今後、身に付けさせたい。

質疑応答

- 児童Aに注目したのはなぜか。→ 児童Aは、書くことだけではなく勉強が苦手な児童。自分なりに書けるようになるためには、どうしたらよいかを考えた。
- 書くことが苦手な子にアドバイス（声かけ）をすると、教師の文章になってしまうことがある。どのような工夫をしているか。→ 児童に質問をし、その子が話をした言葉を文章にするように声をかけている。
- 感想を書かせた際に、誤字脱字等、どこまで直しているか。→ 普段書かせている文章については、あまり直しをしていない。児童の書きたいという気持ちを大切にしている。目標にあわせて、直すか直さないかの判断をすることが必要である。
- 中学校でも、それぞれが好きな本を紹介することがある。自分で本を選ばせると子どもたちの目の輝きが違うように感じる。小学校のうちから、このような学習を進めることは、とても良いと思う。
- １～３年生まで、系統的に指導してきたことは分かった。４～６年生では、どのように指導していくか。担任も代わるのではないか。→ １、２年生も担任を持ったわけではない。過去の担任にどんな指導をしてきたかを聞く等、学校目標を意識し、学校全体で共通した取組をしている。

小中合同協議の柱及び協議概要

協議の柱『生徒・児童が意欲的に「伝え合う」ために、小学校から中学校への学びをどうつなげていくか』４人グループで意見交流し、全体で共有をした。

- 小学校低学年で「伝え合う」ためには、先生がいるからねという安心感が大切。その安心感が中学校につながるのではないか。「伝え合う」ためのクラス作り・環境作りが大切。
- 中学校の発表を聞いて、評価の大切さを感じた。話合い活動をiPad等で撮影し、自分たちで振り返る自己評価も大切ではないか。
- ９年間の見通しを持った指導を行うことが大切。小学校でも６年間系統性をもって指導することは難しい。どの子にも同じように力をつけていかなければならない。
- 伝え合う力を育むには、聞き合うことが大切だと思う。聞いた話を生かして自分の考えを述べる・聞いた話とつなげて考えることが課題である。
- 「伝え合う」手段は、話をすることだけではない。苦手な子は、書いて伝えるという手段もある。
- ２つの小学校の児童が１つの中学校に上がってくる。学んできた内容が違い、小学校で学んできた内容を中学校で生かすことが難しく、ゼロの状態に戻ってしまう。何とかしなければならない。中学生には、高校入試でも書かせる問題が少なく、何のために書くのかの説明が難しい。

まとめ概要

- 教育課程は、授業のネタを得るにとどまらないもの。今回は、年間を通した取組についての発表をした。
- 小学校の学習は、「活動あって学びなし」と言われることがある。力がついているかが大切である。
- 評価計画も含め、カリキュラムマネジメントを行う必要がある。どこで何を教えるかについて、中学校は明文化されていることが多い。小学校も取り入れても良いのではないか。
- ６年間の系統性について、学校全体で作成していくことが大切。その際に９年間を見通したカリキュラムの改善が必要である。
- 中学校の発表にあった「学習プラン」は、小学校でも５年生ぐらいから使えるのではないか。

概　要　報　告

実施期日	８月４日(木)
部　会　名	小学校　社会科部会

神奈川県研究主題　**主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善**

テーマ

『子どもの学びを育てる社会科学習をめざして』

提案概要

５年「未来をつくり出す 工業生産」～31人「みんなが学ぶ」「みんなで学ぶ」を目指して～の学習を通して、研究主題『主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善』およびテーマ『子どもの学びを育てる社会科学習をめざして』にアプローチした実践である。

紹介する本時は、全24時間計画の中の11時間目、大田区のＹ工機：田中さんの仕事・工場（会社）が生み出すもの「Ｒペンの誕生を探ろう」である。Ｙ工機は教科書にも掲載されており、人工心臓など医療関連の開発で有名だが、他にもたくさんの製品を開発している。その中でも今回は「Ｒペン」という、視覚障害者用筆記具の触図筆ペンの開発を学びの対象とした。「Ｒペン」には、子どもたちに絵を描く楽しさを教えたいとＹ工機にFAXを送った盲学校の先生の想いやそれを受け開発に尽力した田中さんたちの想い、そして、それを使い描くことを楽しんでいる子どもたちの想いが詰まっている。本時は田中さんの開発した製品を実際に使ってみたり、資料の情報からわかることを整理したりしながら、田中さんの開発した製品の誕生を探ることを通して、開発したＹ工機の田中さんと盲学校の先生や子どもたちの想いに触れ、新しい製品の開発に関わる人々の工夫や努力について興味をもち、自分の考えを深めることを目標としている。子どもたちの深い学び、主体的な学びへとつなげるため、インタビュー取材をはじめ、問いの設定、資料の出し方、子どもの思考の見取り、評価の在り方など様々な工夫がちりばめられた実践である。

質疑応答

Ｑ：一人一人の考えを一覧表にする際、どのように行ったのか。一覧表を作ったことによる子どもたちの学習への効果はどのようなものであったか。

Ａ：使い方：クラスルームに子どもが考えを書き込み、それをエクセルで一覧にしたり、ノートを確認する際、Googleのマイクボタンを0Nにして、記述された文章を読み上げ音声入力で入れ込んだりした。座席表などに子どもの考えを記入することもある。

効果　：子ども同士で考えを共有することにより、もう一回自分の考えをみなおすことができるという効果がある。手間はかかるが、これがあることでみんなが参加することができる。

Ｑ：Ｒペンに関する学習を学年で取り組んだのか？Ｙ工機へのリモートでのインタビューは、クラスごとに行ったのか？

Ａ：各教室からリモートで同時開催をした。その際、質問はどのクラスでも聞けるように工夫した。学年で同じ教材を扱っているが、クラスごとに子どもが興味を示す部分が違うため、各クラスで焦点の当て方が違ったのも興味深かった。初めて５年生を担当する教師もいたので一緒に取り組むことができてよかった。

Ｑ：課題の解決のための教材の出し方で工夫した点はあるか。また、どの資料が役に立ったか？現地に行ければ良いが、教科書を使いつつ教科書に囚われない授業作りをするにはどのようにすればよいか。

Ａ：子どもの知りたいこと、やりたいことから５年生で扱う内容につながるように工夫している。学習指導要領上身につけたい力に結びつくように単元を構想し練り上げていくようにしている。また、タイムリーな資料の出し方が大切。本時のねらいにつながるように資料を出していくようにしている。

授業の中の子どもの発言や様子から、どの資料を提示するか判断している。また用意した資料を出さない方が、子どもの発想が広がる場合には提示しないこともある。

協議の柱及び協議概要

指導と評価の一体化についてグループ協議を行ったが、主に以下の３つの視点が出された。

① 【主体的に取り組む態度をどう評価するか】
- 毎時間振り返りをさせることが大切。
- 単元終わりで評価する際は、単元の主となる問いを投げかけて、どう子どもがアプローチするかを評価していくこともできる。主発問に対してどう考えたかを見取っていくことが大切。
- 疑問を立てられるかが評価のポイントになる。
- 疑問を立てることから意欲も生まれてくる。

② 【子どもたちの具体的な姿を追って授業改善していくには】
- 単元を貫く問いが大切であり、毎時間振り返りを書かせることも効果的である。
- 単元の最後には「この単元で学んだこと」を書かせ、自分は目標を達成できたかを振り返る。
- できたこと、できなかったこと、足りなかったことを振り返らせ次の学習に生かすサイクルが大切。
- ロイロノートでの評価も生かして次の学習に生かす
- 単元計画の中のどこで何を評価するのかを明確にし、子どもがどこでどう変わったのかを見ていくことが大切。
- どんな授業が取り組みやすいか子どもにアンケートを取るのも効果的。

③ 【今後の課題】
- 授業内で評価できるものを検討していくべき。
- 主体的に取り組む態度は、学校が違っても、同じように評価が行われることが大切。
- 教材研究にかける時間が取れるよう、働き方改革を進めることも重要。
- 授業の質を改善していくためにも、若い先生も一緒に研究をしていくことが大切。

まとめ概要

自分の足で探してきた教材が多く、教材探しへの情熱が感じられる。知識に頼らずに考えられる教材に出会わせるために、日々授業づくりに取り組んでいるからこそ子どもたちが夢中になって学び続けるのだと言える。どの子どもにとっても出会ったことのない製品に目を向けさせており、子どもたちにとって、知りたい・調べたいと思えるものになっていた。また、製品について考えさせる資料を様々に用意しながら、教えすぎず、子どもの思考に任せ、子ども同士の対話を見守られていたことも、子どもたちが学習課題に主体的に学ぶ姿につながっていた。

主体的で深い学びへとつなげていくには、単元を貫く問いの設定が大切。その「問い」が、インターネットで検索すればわかるようなものではなく、多様な答えが発生するような問いであれば、子どもたちは、様々な考えに出会うことができる。そして、対話的な学習場面をつくることによって、自分の考えはどうなのか見直し調整することで、考えを深めていくことができる。

中央教育審議会答申には次のように示されている。① 学ぶことに興味や関心をもち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取組、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。② 子ども同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。③ 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。これらの視点で授業改善をしていくためには、目の前の子どもの学習状況を見取ることが何よりも大切である。

概　要　報　告

実施期日	８月　２日(火)
部 会 名	小学校　算数部会

神奈川県研究主題

『主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善』

テーマ

『５学年の学習内容における非定型問題の提案』

提案概要

○ 提案者の課題意識

児童にとって算数の授業は楽しいものだろうか。楽しいから進んで取り組む。楽しいからだれかと共有したい。楽しいから深く学びたい。楽しさは主体的・対話的で深い学びを実現する、最も大切な視点だと考えている。

そこで、従来の一問一答の定型問題を扱う授業とは別の方法で、思考力や表現力を育成する非定型問題を解決する、楽しい授業をつくりたいと考えた。

一つの答えを求める定型問題の多くは、他の学習機会で学習内容を身に付けている児童にとっては簡単なものであり、進んで取り組みたい、だれかと考えを共有したいという気持ちが薄まってしまう。一方で、非定型問題を課題にすることで、児童の考えが多様になり、深く学びたいという意欲を引き出せるのではないか。

日頃から、クラス全員が参加できる授業の導入の工夫をし、児童が必然的に協働したい、話し合いたい、友達がどう考えたのかを聞きたいと感じられる課題を準備することで、児童の「ワクワク」「ドキドキ」が生まれる楽しい授業を生み出したいと考えている。

○ 実践の概要

〈偶発的に学習が深まった場面の例〉

出てくる考えを想定しながら授業を組み立てているが、例えば、この計算で、３から７はひけないから、10かりてきて… と子どもたちは考えるだろうというイメージで授業にのぞんだとする。すると、児童から７ひく３は４だからという意見が出てくる。

事前にこういう考えが出てきたら… と計画していくことが必要。そして意図して評価をしていく。子どもの考えだけで深まっていくのではなく、教師の意図が大切である。

〈模擬授業　「体積」実践例〉

立体図形の体積を求めるときに必要な長さを考える。

クラス全員でどの辺の長さが必要かを考えることで、自分ごとになっていくのではないかと考えた。

全員が体積の求め方を語っていく中で、体積の求め方に深まりが出てくるのではないかと思う。

この学習を通して、立体図形の高さの重要性が児童の中に入っていくのだと考える。

〈「割合」実践例〉

シュートが何本中何本入ったかという表を提示して「誰が一番入ったといえるか」という課題設定よりも、結果で考えられた方が割合に結びつきやすいと考え、保健委員会の取組である「ハンカチモニタリング」を題材とし、一番持ってきたといえるクラス・学年はどこだろうという課題を設定した。

また、委員会活動で実施されていることなので、児童がより自分ごととして考えられる課題

だといえる。
　「分数で考える子が多いのでは」という想定でのぞんだが、実際は、一人あたり○枚という考え方をする児童が多く偶発的に学習が深まってしまった。もう少し多様な考え方を想定しておくべきだった。

質疑応答

Ｑ：体積の学習の本時の前時では、複合図形についてどのように体積を求めたのか知りたい。
　本時の後に３つの適応問題があるが、㋐と考えた子に対して、どのような手立てをとったのかが知りたい。

感想：５，６年算数を教えている。６年生でも高さの概念がなく、横に高さが伸びていることが想像しづらい。そのため、５年生で扱うところの難しさがあると感じた。

Ａ：この後の協議の中で、みなさんならどうしていくのか話し合えればと思う。

協議の柱及び協議概要

〈協議の柱〉

「一人ひとりが自分の考えをもち、多様な解決や表現ができる、楽しい算数の授業実践例の交流」

４人一組のグループに分かれ、これまで行ってきた自分の実践や参観した授業について交流した。グループでの話合い後、全体でそれぞれのグループの話を共有した。

〈実践例〉

・資料の整理　まんがのキャラクター　テレビアニメのじゃんけんの割合
・運動会シーズンに、平均の学習
・遠足へ行く前に、回り方は何パターンあるか考える
・６年生「場合の数」　修学旅行の自由コースの回り方は何通りあるかを考える
・図形の学習は、タブレットを使ってみると興味関心が高まる
・カナヘビの長さを手作り定規で比べる　（他教科との関連）
・かけ算　○をたくさんつくって、いろんなかけざんをさがしていく
・５年生「分数のわり算」　２リットルを３人で分けると一人分は？　３分の１、３分の２　どっちだと思う？　なぜそう考えたのか考える（選択肢を与えることで全員が参加できる）
・複合図形では、はじめに答えを伝えておくと、求め方のほうに焦点化できる
・1000立方センチメートルの図形を書いてみる　（複合図形や穴抜きの図形にも挑戦）
・三角形の合同条件は何個必要か　みんなで対話的に考える

まとめ概要

・楽しさの感じ方は、一人ひとり違うので、全員が楽しいというのはなかなか難しいが、非定型問題では、発問の仕方によって色々な意見が出せるので、とてもよい。また、生活に身近な問題を取り上げたことで、主体性に結びついていた。
・楽しい算数になるには、教師の色々な準備、しかけが必要である。そして、題材だけに頼らずに、どう展開していくかがとても重要である。
・本実践は、教科書の問題をそのまま与えるのではなく、一歩進んで、子どもたちの様子をしっかりとイメージしながら、さらに子ども達の考えを深めるにはどうしたらよいのか、考えられている。
・目の前にいる子ども達に、全員が参加できる工夫をすることを諦めずに挑戦しつづけることが大切である。また、子ども達がお互いに相手の意見を聞きたくなる、そんな工夫が必要である。

概　要　報　告

実施期日	８月３日(水)
部　会　名	小学校　理科部会

神奈川県研究主題

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

テーマ

『メダカの成長を通じて理科の楽しさを感じる授業』

提案概要

小学５年生　理科　単元「メダカの誕生」を通じた授業提案

＜実践に向けて＞

・児童の実態（→ 生き物が好き・観察が好き（アンケートによる）＝生物に対する関心の高さ）を受け、〝理科の楽しさ〟を感じられる授業展開を目指す。

・観察・実験をもとに考察を深め、主体的、対話的で深い学びを実現したい。

＜単元計画＞

・第1・2時において、メダカを観察し、雄と雌の区別の仕方を知り、選別する。→ ・第３時でメダカの卵がどのように変化していくかを予想する。→ 第４時（本時）で観察、記録をする。→ 第５時で結果を基にした考察。

＜実践上の工夫＞

児童が楽しみながら学びを実現できるようにするための工夫として、観察対象がよく見えるように、よく育つように、増えるように、そして、身近に感じられるようにするために、様々な手立てを講じた。

（例　水の透明度を高めるために赤玉土を使用　卵を直接採取　卵を日付け順に保管　など）

→ これにより、授業時だけでなく休み時間にも自主的に観察する児童が見られた。

＜本時の授業＞

目標：メダカの卵の中の様子を、変化したところを比べながら調べ、得られた結果を記録する。

・本時では産卵日別に分けてあるものをグループごとに顕微鏡で観察し、記録した。児童たちは夢中になって観察していた。

→ 次時（第５時）で観察結果から「考察」を行った。考察の中で、

・卵の中の変化が分かった　　・10日くらいで大人のメダカと同じ形になる

・おなかの膨らみは何か？（大人のメダカには無い）

といった、結果と照らし合わせながら考察し合い、疑問を見つけ出す児童もいた。

（※ 授業時の発言だけでなく、授業後の振り返り記述の中からも児童の学びを見取った。）

＜成果と課題＞

成果

・主体的、対話的で深い学びの姿として、本時で得られた結果をもとに考え、他者と考察し合う姿、場面が見られた。

課題

・考えが持てていても、それを深めるまでには至らなかった児童も見られた。→ （児童の学びを深めるために）必然性を持たせるような話題の提示の工夫や、議論の場を設定することが必要である。

成果と課題を受け、本実践における成果と課題を「授業改善」へと生かすことで、より「主体的、対話的で深い学び」の実現へつなげていきたい。

質疑応答

質疑応答の時間では無し。次の協議の中で出された。

協議の柱及び協議概要

（グループ協議と、そこから出された【意見】や【質問】）

・【意見】最初に観察した時、自分では気付かなかったことに気付く他の児童が増えていくほど、その気付きから対話が生まれる。
・【質問】生き物を題材にする単元の場合、観察のタイミングが合わないときがある。授業において電子機器を併用したのか。
・【質問】主体的、対話的で深い学びの評価について、第1時の時点で具体的にどのような発言が子どもからあったか。→【回答】個体差について言及、○○すればメダカについて知ることができるよねと発言する児童がいた。
・【質問】日別の卵は事前に用意していたのか。→【回答】毎日採取し、日別に分けておいた。10日分ほどためて用意していた。
・【意見】あえて日にちを示さず（ABCのように記号を付けるなどし）、「どれが何日目の卵だろう？」と問いかけてみること、他の魚の卵も見せることで「どれがメダカだろう？」と問いかけてみることも面白い。

まとめ概要（指導助言者より）

・授業改善を行う視点として、学習指導要領解説（理科編）の「単元など内容や時間のまとまりを見通して」の視点が大切である。
→（要約すると）育みたい資質能力をどのような順序、方法で育成するか、何時間で単元を構成するか、どのような工夫をするか、意見交換や議論する活動をどこで行うか等の指導計画を考える必要がある。また、指導計画の作成にあたり、まとまりを、見通しをもってとらえ、まとまりのカリキュラムをマネジメントしていくことが大切。
・本授業提案は、児童の関心を高め、主体的な学びをつくり出すために、事前準備に様々な工夫がなされていた。事前準備により、児童が観察対象の何を観察すればよいか理解しやすくなり、ねらいや活動を焦点化することにつながる。
・日付別の卵が入ったビーカーを複数準備し、観察時間をより長く確保したことは、個別最適な学びを実現するという側面もあった。→児童一人一人の観察ペースや気付きの違いは、次時の児童同士の共有の場面につながる。
・「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、単元の中で何をどの順序で学習し、深い学びへとつなげていくか、準備にどのような工夫をすれば児童の関心を高められるか、単元全体で計画することの大切さを学ぶことができた実践提案であった。
・本単元を、他の単元や他学年での学習内容と結びつけながら計画していくことも効果的である。

概　要　報　告

実施期日	８月２日(火)　【午前】
部 会 名	小学校　生活

神奈川県研究主題　主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善

テーマ『年間を通した、主体的・対話的で深い学びの学習』
～気づきの質を高める、６つの視点を通して～

提案概要

１．テーマ設定の理由

提案した学校では、「めざす子ども像」として、「思いやりのある子」「心も体も大切にする子」「進んで取り組む子」の３つを掲げている。そこで、提案者は「勇気 100%」をクラス目標とし、何事にも本気で挑戦して取り組み、挑戦する友だちを応援できるような学級作りを目指した。

挑戦する勇気を持つためには、自分自身の成長に気づき、自己肯定感を向上させることが大切だと考え、提案では、生活科を中心とした一年間の授業実践の中で、友だちとの関わり合いを大切にしながら、自分自身の成長に気づき、自己肯定感を向上させるような活動を目指した。

そこで、本研究のテーマを『年間を通した、主体的・対話的で深い学びの学習』と設定した。また、実践の柱として、小学校指導要領　生活編（２）改訂の要点④ より、気づきの質を高めるための６つの視点（見つける・比べる・たとえる・試す・見通す・工夫する）を意識しながら取り組むこととした。

２．実践の概要

【実践１　ほめほめノート】（気づきの視点：見付ける・比べる）

その週にできるようになったことを見つけて、ノートに書きだし、「自己評価」を習慣的に行っていく。さらに、「他者評価」を行うことで自分では気付かなかった長所を見つける。そして、友だちのできるようになったことと自分のできるようになったことを比べる。

＊書く曜日を固定し、主体的に取り組むことができるように、班ごとに分けて保管しておく。

【実践２　今日のヒーロー】（気づきの視点：見付ける）

朝の会でくじを引き、くじで引いた人の良いところを一日観察する。それを帰りの会で発表する。

【実践３　クラス全員ですごろく作り】（気づきの視点：見通す・比べる）

１学期でできるようになったことを「すごろく」という身近なものに可視化することで、児童自身に達成感やクラスの一体感をもたせる。

【実践４　ほめほめノートのパワーアップ】（気づきの視点：工夫する）

友だちが褒めてくれた言葉に対して、返事を書く活動を行い、より具体的な書き方を工夫する。

【実践５　自分の成長「ベスト 10」を書く】（気づきの視点：見付ける・比べる・試す・見通す）

「ほめほめノートで書きためたできるようになったこと」と「ヒーローで褒められたこと」から特別な 10 個を選んで書きだす。選んだ理由も簡単に書く。

【実践６　未来カード作り】（気づきの視点：見付ける・見通す・比べる）

「どんな３年生になりたいか」「２年生の終わりにどのようなカードがほしいか」ということを考える活動を行い、それをカードに書く。

【実践７　ありがとうカードの作成】（気づきの視点：見付ける・比べる）

「成長とは何か」ということを考える活動を行い、それぞれ「支えてくれている人は誰なのか」

を挙げていった。すると家族と先生が多いことを見つけ、ありがとうの気持ちをカードに示す。
【実践８　カードを選出し絵本としてまとめる】（気づきの視点：工夫する）
　１年間書きためた 20 枚のカードの中から、15 枚を選び絵本として自分の成長をまとめる。
　以上の実践において「自分の考えや意見をどのようにまとめたら表現しやすいか」について子どもたちが話し合い、意見を出し合うことで、友だちとの関わり合いを通して一緒につくりあげた生活科の実践となった。

質疑応答

〈１年生と２年生の成長単元の違いは何か。〉
　生活科の場合は繰り返し活動を行うという意味で、１年生で初めてできたこと、２年生ではさらに発展的なことに取り組んでいく視点が必要となる。

協議の柱及び協議概要

① 単元（自らの成長単元）の取り扱い方は
・３学期に３年生に向けて成長の姿をまとめることが多いが、一年を通して写真を撮りためることは、自分を振り返りやすくする工夫になる。
・等身大の自分を模造紙に描き、赤ちゃんの自分とを比べる→ 算数の物差しの単元ともリンクさせることができる。
・学校の活動に絞ると学習のねらいを定めやすくて良い。
② 子どもの成長のまとめ方は
・成長ポスターを作成し、自分の良いところをたくさん貼っていく。また、成長カードで特に大事なことについては月ごとにファイリングし、書いたものの余ったカードは最後のページにまとめてファイリングする。
・1 行日記を書きためる。１年を通して振り返りができるように可視化する。
・1 年間の成長を劇で行う
③ 気づきの質を高める工夫は
・観察をした後に友だちに付箋でコメントを書いてもらい、うれしかったことを発表する時間を設ける。どのように書いたらいいのか黒板の提示の仕方も工夫が必要。
・自分以外の人に自分のことを考えてもらうことの重要性。自分が気が付けなかった良い部分を知るいい機会になり、自分は今後どんな風に頑張るのか、自分のことを考える時間も濃くなる。
・児童の動機の持たせ方→ 子どもの気付きや疑問を拾って単元を進めていく。その気付きや疑問を理解していくためには何をすればいいのかを自分たちで考えさせる。

まとめ概要

　子どものゴールの姿を見据えて年間を通じて単元構成をしたことが提案性の高いものとなった。４月のアンケートでデータに基づくエビデンスを取って、児童の実態からいかに子どもたちの自己肯定感を向上できるかというねらいをもとに実践を行いテーマに迫ることができた。子どもの成長が花開くように逆算して取り組むことがカリキュラムマネジメントであり、子どもの姿から計画を立てていく PDCA サイクルになる。それが指導と評価の一体化につながる。学習指導要領で重点になっていることが行われた実践となった。一人ひとりの気づきに寄り添い、子どもの背景をとらえたうえで子どもに注目し、励まし、背中を押してあげるイメージを持つことが、自己肯定感が高まる活動に繋がっていた。

概　要　報　告

実施期日	８月２日(火)
部　会　名	小学校　音楽部会

神奈川県研究主題

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

テーマ

『思いや意図をもって音楽づくりを行い、音楽に主体的に関わろうとする態度を育てる～演奏経験が少ない場面でのICTを活用した音楽づくり～』

提案概要

・和音に合う旋律づくりの６年生での実践
・全員一斉に使うことのできるタブレットを活用し授業以外に家庭でも音楽に親しめるように
・音楽づくりだけでなく楽器の代わりになることを期待
・困っている子にその子の自動演奏を聴かせることで前向きに
・子どもたちへのアンケートの結果、最初音楽づくりを難しいととらえていた子たちが意外にできたと感じるようになった

質疑応答

・作曲ソフトは難しいのではないか。
・タブレットでは運指がくずれないか。
・音を選択するだけだと最終的にはリズムが細かくなるだけではないか。
・歌や器楽が好きだという子たちなのになぜ音楽づくりなのか。
・この後どう協働につなげていくのか。
・30人を越えるクラスで一人一人自分のつくっている音を確かめられるか。
・子どもはリズムがなかなかできないと思うがこれまでリズムについて学習を積み重ねてきたのか。

→ 色々な方法で音楽づくりが考えられるが、子どもたちにとって初めてのことであり、同じソフトを使って全員で揃えて指導し、混乱させないように心がけた。指づかいや音の選択についても様々な方法があると思うが、今回の実践では和音の移り変わりが感じられればよいとした。歌や器楽には制限があり、みんながやれる形で授業を行った。全員一斉にそれぞれ音楽づくりしているときでもタブレットからの音を一人一人無理なく聴くことができていた。リズムについては４月から毎時間打たせたり読ませたりして、読める子が増えた。

協議の柱及び協議概要

協議の柱１　コロナ禍での授業の工夫について（ICTの活用等）

・ネットのサイトを使って同じような授業をした。
・ICTを電子黒板として活用。ICTが遊びで終わらないように。
・ICTを活用して歌、リコーダー、鍵盤ハーモニカを個人で録画して提出させる。その子の音だけ聞こえるし一人ずつ呼ぶよりも短時間で済む。ICTを使ってリコーダーを家で練習すると速さを変えられて便利。録画は放課後教師が見るのに時間がかかる。
・ロイロノートに教師の模範演奏をのせ、授業では15分ぐらいにとどめ、自宅で見られるようにする。同じように伴奏だけ入れて、家で練習できるようにした。また、合奏についても、録画しておいたものを使って休み時間に練習ができるようにした。
・鍵盤アプリを使って指の動きの練習はできたが、息の入れ方が分かっていない。電子キーボードを購入し２人で１台ずつ。運指を教え合いながら。こちらも息の使い方は教えられない。

・床に５線を作って「ドの所に立ってね」など指示し、その後動かすなど。
・生の音を大事にしたいので、できるだけ生の音で行った。シールドを周りにはったり、距離を取ったり、対面にならないように、消毒等、音楽の時間にクラスターが出たということにならないように。部屋を分けて行う。クラスを半分に。外や屋上も使った。同じ部屋でも、指だけを練習する列、音を出す列に分ける。市松柄にする。色分けするなどして半数でリコーダーができるように。グループを分けて活動すると評価が普段の倍かかる。距離を取るので対話ができない。
・ボディーパーカッション。カスタネットの動画を見せる。打楽器でリズム遊び。卓上鉄琴を購入した。トーンチャイムや和太鼓を使う。リズムを言葉のもつリズムで。終わり方のルールを決めておく。バンダナマスクを手作り。
・イヤホンを個人持ちにさせた。ソングメーカーで音楽づくり。音符の長さは出ない。ICTでは鍵盤を押す感覚はない。大型テレビを使ってみんなで見られるようにした。演奏を見せたりやったりするのは本物の楽器の方が良い。支援が必要な子も動画を撮ることで参加できた。
・歌は回数や時間に制限。いい音が体に染み込むほど時間を与えられない。
・マスクをしているので顔の見えるパーセンテージが少なくなったが、上手な子の表情筋、背中から見たブレスなど、色んな方向から見せることができる。
・ICTを使って鑑賞をすると、映像として分かりやすい。楽器がいくつあるかなど。お祭りの映像の提示。担任によって使う、使わないなど情報の共有が必要。
・地域による対応の差。藤沢はクロームブック、茅ヶ崎と鎌倉はiPadを使っている。ICTは子どもの食いつきが良いし、自動演奏してくれる。タブレットがあっても役に立つソフトがないと。ピアノアプリにいい物がなくて活用できない。

協議の柱２　主体的・対話的で深い学びの評価について
・教師の見取り方によっても変わる。ちょっとずつメモを取っておく。書くことが苦手な子の見取り方をどうするか。距離を近づけられないと協働させられない。
・どんな風に楽しんでいるか肉眼で。顔が見えたらよいが、鼻歌を歌っている、体を動かしているなど。振り返りは、毎回はできないがテストや鑑賞のときに。
・子どもたちはいつまでに発表するなど、発表会がないと主体的になりにくい。
・Aの基準が難しい。「進んで」とは何？　どうやって見取るのか。ワークシートの場合、量は多くても内容の薄い子、少ないが端的、文章を読んで何が主体的なのか。主体的であっても、知識、技能が伴わない子はAになることは少ないのではないか。文章力がない子をどう見取るか。
・ICTを活用して録画を子どもが見返すことで、自分が思っているのと同じになっているか、ずれを直そうとすることで調整力を見られるのではないか。
・技術習得ありきではなく、速度を体で表す、友達を見て動いてみて分かるという対話。音楽づくりを一つの入り口として、友達のモチーフとつなげて楽しい、また、今回つくったものをAとして、二つ目は発展的に違う和音進行をつくりA→B→Aとするなどすると、今後別の歌を聴いたときに気付く子もいるのでは。気付いた子を見取る場面を増やす。
・自分で演奏して響きが分かるといいが、演奏していない。今回の実践で、子どもがどんなテーマを設定していたか知りたかった。関心について予想のつかないような音楽をつくった子をどう評価するか。
・黒鍵を使ってより発展的になると良い。音符について週１～２回の音楽の授業だけでは定着が難しい。

まとめ概要

・コロナ禍ではあるが、できることを探す。新しいやり方を探す。各市町で努力していることの共有を。
・評価については、〔別紙４〕各教科等・各学年等の評価の観点等及びその趣旨（小学校及び特別支援学校小学部並びに中学校及び特別支援学校中学部）、学習評価のあり方ハンドブックを参考に。

概　要　報　告

実施期日	８月４日(金)
部　会　名	小学校　図画工作部会

神奈川県研究主題

個々の子どもの困難さに応じた指導内容や指導方法の工夫

テーマ

『誰もが楽しめる図工の授業　～表現する楽しさを伝えよう～』

提案概要

本来、児童はそれぞれ個性的な感性をもっており、表現することが重要である。しかし、周囲の目や「上手に作らなくてはいけない」という固定観念から、「どう表現すればよいのか」と悩み、苦手意識をもってしまう。それらの理由から、表現することをためらったり、意欲や関心をもつことが難しかったりする児童が一定数存在する。そのような児童が上手下手や第三者の評価に捉われず、「表現することが楽しい」と感じられる授業にするためには、どのような内容や工夫が必要かを考え、実施した。

〇実践題材名　　「未来のわたし」

未来の自分を想像し、自分が将来したいことなどを考え、材料や形の作り方を工夫して、形や色などの造形的な特徴を捉え、夢や願いを込めて立体に表す。

【発想を広げる工夫】

児童たちの知っている職業は、非常に限られているので、やりたい仕事・やってみたい仕事を見つけやすくするため、「13歳のハローワークマップ」を活用した。仕事探しに困っている児童には、児童の長所「手先が器用」「作業が丁寧」などを伝えて仕事を探すきっかけを伝えた。また、やりたい仕事がハローワークマップに載っていなくて困っていた児童には、やりたい仕事に繋がりそうな分野を伝え、アドバイスをした。「13歳のハローワークマップ」を使用したことで、やりたい仕事が見つかったりどんな仕事があるのかが分かったりして、仕事を知るきっかけになった。さらに、詳しく調べるのにタブレット端末も活用しながら仕事調べをすることで、より具体的にその仕事を調べることができ、子どもたちの意欲につながっていた。

場の設定・材料では、児童が使いそうな布や廃材、道具を集めて制作意欲がわくように場の工夫を行った。児童が使いそうな布や廃材、道具を集めて準備したことによって、児童がイメージした形を自由に表現できたり、意欲をもって取り組むことができたりしていた。

【道具を安全に迷わないで使う工夫（針金やペンチの使い方）】

前学年までの学習で行っているペンチや針金の使い方ではあるが、児童が安心・安全に使用できるように再度使い方を確認して、黒板に掲示した。

前学年までに習得している技術であったが、児童が道具を安全に安心して使用するために、再度針金やペンチなどの道具の使用方法を全体で確認したことで、誰もが安心して作業を行っていた。

また、針金の先にビニールテープを巻くことで、針金を安全に使用することができていた。

針金で人型をつくって自分が表したいポーズ形成するとき、実際にどんな場面を表現したいのかを想像させ関節を意識しながら形をつくらせた。形成に困っている児童には、タブレット端末を利用して、自分の表したい形を調べさせて取り組むことで、安心して表現することができていた。

質疑応答

・図画工作が苦手、というのは、いけないことなのか。
→ 苦手な児童生徒がいることは大前提。それを矯正するのではなく、そのような自分を認めた上で、どう取り組むのかが大切。
・題材を「職業」に限定した理由は。
→ 限定はしておらず、「夢」か「したいこと」の２択であったが、職業を選んでいる児童が殆どであったため、限定したような授業になってしまった。

協議の柱及び協議概要

協議の柱≪ 図画工作において、苦手意識をもっている児童が、主体的に取り組める仕掛けについて≫
・自由度が高いと逆に難しいため、どこを自由にするかのメリハリが重要である。
・インターネットの情報は様々な情報を取得することができるが、他者のアイデアを自分のアイデアにしてしまうことで発想力が失われてしまう危険性があるため、慎重に活用すべきである。
・困り感のある児童へ、担任がサポートできる「引き出し」をいくつ持っているかが重要である。

まとめ概要

・指導の個別化、学習の個別化に協同的な学びを加えたものを、どう児童生徒たちに「蓄積」させていくかが重要と考えた。
・小中連携については、どのような指導をしてきたかという「記録」が、「指導要領」であるため、情報を共有するためにも、日ごろからよく読み理解しておくことが大切である。
・ICTのよさを知り、積極的に今後も活用していく重要性を感じた。

概　要　報　告

実施期日	８月２日(火)
部　会　名	小学校　家庭部会

神奈川県研究主題

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

テーマ

『一人ひとりの児童が、主体的に課題を解決することができる授業づくりや教材の工夫
～生活を振り返って大切に使おう！お金と物～』

提案概要

【題材】生活を支えるお金と物　　**【学年】**第５学年

【題材について】今回の学習指導要領の改訂で、「C消費生活・環境」領域に新設された「買物の仕組みや消費の役割」の内容の実践である。中学校で学習する内容の基礎を学び、また、持続可能な社会の構築に向けて、主体的に生活を工夫できる消費者としての素地を育てることを意図している。

【「生活を振り返る」「学ぶ」「生活に生かす」という３段階を意識した題材の指導計画】

「生活を振り返る」：神奈川県消費生活課作成のワークシート「おこづかい帳を学んでお金名人をめざそう」を活用し、児童が主体的に普段の生活を振り返る。授業者は児童の金銭にかかわることについて、実態を把握しておく。

「学ぶ」：収入や支出のバランスの大切さ、計画的にお金を使うことの大切さ（購入する鉛筆の選び方）、売買契約の基礎について学ぶ。

「生活に生かす」：藤沢市小学校教育研究会家庭科部で作成した買い物すごろくを使用し、おこづかいを使った買い物の疑似体験をする。授業の中で買い物実習を行うことは難しいため、すごろくを通して、楽しみながら、実生活に結び付け学んだことを生かす場とする。

【手立て】「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」に迫るため８つの手立てを講じ、それぞれについて成果と課題を考察した。

① アンケート　② 視覚化　③ 時事的・身近な話題での意欲喚起　④ おこづかい帳　⑤ プリペイドカード（神奈川県消費生活課作成のワークシート）　⑥ ICT機器の活用　⑦ 身近な題材　⑧ 買い物すごろく

【実践のまとめ】身近な物（鉛筆）の選び方、買い方について考える活動を取り入れたことにより、商品を選ぶ際の観点や購入するために必要な情報の収集・整理について学ぶことができた。児童は金銭の取り扱いに関する経験の差が大きく、家庭によって考え方も違うため、授業にあたって配慮が必要な点は多い。必ずしも正解は一つではない、ということも伝えた。まとめとしての「すごろく」の活動は、ゲーム的要素が強く、学んだ知識・技能を買い物場面で生かしているのかを見取ることは難しかった。学んだことを生活に生かしている場面をどう見取るかについて、さらに改善していく必要がある。

質疑応答

〇キャッシュレス化について、どのような内容の指導をしていく必要があるのか。

→ 金銭の取り扱いについてしっかり身に付けさせた上で、他教科とも関連させながらプリペイドカード等も金銭と同じ価値があり、大切に扱わなければならないものであることを理解させる必要がある。

〇実践後、児童がこの題材で学んだことを生かして活動できるのは、どのような学習活動か。

→ 調理や裁縫の材料の購入計画や修学旅行のお土産の購入計画を立てる時等、鉛筆とは違う観点（新鮮さ、添加物、限られた金額の中で、誰かのために、必要なもの等）を考えさせることができる。

〇生活するために必要なお金の項目が、黒板いっぱいに書き出された板書は視覚的効果がとても高い。通信費医療費等、普段児童が意識していない、目に見えないものにもお金がかかっていることも一目瞭然で、とてもわかりやすかった。単元全体が、児童と保護者も一緒に考えると良い内容だと思う。（感想）

協議の柱及び協議概要

柱（１）学びを「生活に生かす」場面の題材構成

〈買い物すごろく（買い物の疑似体験）について〉

〇良さ

・それぞれの家庭によって金銭にまつわる状況が違う中で、その場の児童がみんな同じ条件で取り組める。（おこづかいをもらっていない児童も、おこづかい帳をつけながらの買い物体験ができる。）

・リストから選ぶ等、自分で購入するものを選ぶ経験ができる。

・この単元の導入として、活用することもできる。

・学ばせたいことに合わせて、様々に改良ができる。例：① 光熱費等、目に見えないもの等、購入するものの種類を増やす② お祭りの日等、設定場面を具体的にする③ お手伝いをしてこづかいをもらえる設定

〇ゲーム的要素（ゴールの速さ、金額の多さ、購入したものの多さ）だけにとらわれないためにはどうしたら良いか、工夫や手立て

① 実際の買い物のように、購入する理由を考えさせる② 自分のため、家族のため等、選ぶ条件を付ける③ どういう目的ですごろくに臨むか（節約する、人生を豊かにする等）を発表する④ 自分が購入したものや購入して良かったこと、反省等をワークシートを使って振り返る。

〈学びを「生活に生かす」学習の場面にはどのようなものがあるか〉

・お店屋さんごっこ等のロールプレイ。

・実際に買い物に行く。（調理実習、お楽しみ会等実際の活動と関連付けると良い。）

・家の人に買い物の時に、どんな工夫をしているのかインタビューする。

・遠足のお菓子をどういう観点で買ったか、振り返りをする。

柱（２）消費生活についての今後の課題

〇壊れたら新しいものを買えばよいという、「大量消費」の価値観の保護者と接することも多い。学校と家庭の金銭や物に対する価値観が違い、学校で学んだことを家庭で実践することが難しいケースも増えていると感じる。しかし、これから児童が目指さなければならないのは「大量消費」の社会ではなく「持続可能」な社会であるから、学校では変わらずに「物を大事に使う」という価値観を大切にして、授業を通して児童を育てていかなければならない。

〇携帯電話を所持している児童も増えてきており、ゲームの課金等のトラブルがある。キャッシュレス化の中、生活の中で金銭感覚を養うことが難しくなっているが、それでもお金の価値を教えていかなければならない。そのためには、学校では現金を扱い、限りあるお金を計画的に使うことや、物を購入する時の物の選び方（比べる、その情報が正しいか判断する等）を学ぶ必要がある。

まとめ概要

家庭科は体験的な学習内容が多くあり、児童が楽しんで学習できる教科であるが、「消費生活・環境」の領域は、各家庭の価値観が多様化していることによる環境の違いや経験の個人差が大きく、指導の難しさがある。また、生活の中で学びを生かす機会が少ない。だからこそ、学校で学ぶ意義がある。今回の実践では目の前にいる児童の実態を把握してから計画を立てている。また、児童が自分事として自分の生活を振り返ることから学習をスタートさせ「主体的な学び」とするために、ワークシートはとても有効であった。ICT機器を活用することによって、ペアや全体での意見の共有をより容易に効果的に行うことができ、「対話的な学び」につながった。すごろくを活用することで、児童が学んだことを生かす場面を設定でき、「深い学び」となった。一つひとつの手立てやそれによる学びが積み重なって、後に生活の中でも学びを生かすことができると考えている。限りあるものやお金の大切さや、自分の消費生活が身近な環境に与える影響について考え、主体的に消費生活にかかわる消費者としての素地を作っていくことを目指すために、今後は各領域、また他教科との関連も考えたカリキュラム・マネジメントと小中の連携もより大切になってくる。

概　要　報　告

実施期日	令和４年　８月３日　（水）
部　会　名	小学校　体育部会

神奈川県研究主題

主体的・対話的で深い学びの視点からの指導改善

テーマ

『地域や家庭、仲間と関わり自ら進んで考える保健学習』

提案概要

鎌倉市学校教育研究会体育部会では、20 年以上前から『生きる力を育む体育学習』という同じ研究テーマで研究を続けている。このテーマを達成するために、Ａ：「自分を知る」Ｂ：「めあてをもつ」Ｃ：「達成するための意志と活動」といった３つのポイントに分け、授業を行ってきた。本研究では、これらの研究テーマ及び学校教育目標の２本を柱として、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善を目指した。

【授業の実践内容・具体】（手立て）

保健の授業だけでなく、総合的な学習の時間でも「健康のひみつをさがそう」をテーマに学習を進めていった。総合的な学習の時間では、学校の特色である地域との連携性の高さを生かし、地域や保護者に健康の秘密についてインタビューを行った。

保健の授業では、体育の研究テーマを特に意識して実践した。健康を数値化しその根拠を考えたり、紙芝居を用いて登場人物の健康を考えたりしながら自分自身の健康について振り返る活動を行った。

【授業実践の成果と課題】

インタビューにより人と関わることで、抽象的な健康のイメージからより具体的なイメージへと変わり、健康の大切さを実感し、意欲的に毎日の生活を送ろうとする様子がみられた。

課題として、普段の生活が健康に結びついているという意識を継続するために、引き続き声掛けを行い、また、他教科での健康に係る活動や意識付けを行っていきたい。

質疑応答

Ｑ１：提案資料６ページの「健康な生活につながる生活課題についてのアンケート」について、保護者のアンケートは保護者が自分自身のことを回答しているのか、それとも子どものことを回答しているのか。

Ａ１：保護者から見た児童のことを回答している。

Ｑ２：総合的な学習の時間では何時間、授業時間数をとったのか。

Ａ２：合計で６～７時間。インタビューは放課後に行った児童もいた。

Ｑ３：今回の実践を来年度以降も取り組む予定はあるのか。

Ａ３：今回の実践は本校でも共有しているが、次年度の担任のカリキュラム編成による。

協議の柱及び協議概要

・協議の柱「今回の手立ては有効であったか」
・児童だけで意識するのではなく、アンケート調査やインタビューにより保護者や地域の方を巻き込んだことはとても有効だった。
・保健と総合の合科は有効であった。
・児童の健康に関して数値化した後の扱いが難しいと感じた。
・紙芝居や場の設定が有効だった。

まとめ概要

保健授業は「テストのための保健」「雨が降ったから保健」になりがちである。
また、教科書の内容をそのまま写すなど、身につかない知識の習得になりがちである。
保健を自分事として考えるような授業にしていく必要がある。

【手立ての意義から考える】

１．体育（保健）＋総合的な学習の時間
　⇒ 教科等横断的な学習、跳び越える学び

２．アンケート調査
　⇒ 子どもの健康意識と親の健康意識のズレの可視化。「ズレ」から「問い」が生まれる。

３．健康の数値化
　⇒ 見えないものの「見える化」。なぜその点数にしたのかが重要

４．紙芝居
　⇒ 他人事による自分事の相対化

５．地域、保護者へのインタビュー
　⇒ 健康への方略の広がり　地域の人から健康についての考え方を得る。

【健康の意義】

ウェルビーイング「Well-being」。身体的な健康だけでなく、精神的、社会的な健康も視点に。

概　要　報　告

実施期日	８月４日(水)
部　会　名	小学校　外国語活動・外国語部会

神奈川県研究主題

『　主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善　』

テーマ

「‘伝えたい’をつなげる言語活動」

提案概要

（１）アンケートを実施して

児童の実態を調査するため、「外国語の授業に対する児童の考え」についてアンケートを実施した。その結果、「全体の場での発表を苦手としている」「自分の考えを、外国語を用いて即興で伝えることが苦手と感じている」「文構造を理解するまで、声に出して伝えることに抵抗を感じている」という課題が見えてきた。そこで、課題解決のために、４つの手立てを取り入れていった。㋐相手に話したくなるような場の設定の工夫、㋑自分の考えを発信することの困り事を軽減させるための工夫、㋒インプットの工夫、㋓ペア、グループ(少人数)活動でのアウトプットの工夫、である。特に「㋐相手に話したくなるような場の設定の工夫」、「㋑自分の考えを発信することの困り事を軽減させるための工夫」を行うことで児童一人ひとりの‘伝えたい’という思いを引き出し、児童が主体的に英語を用いて相手とコミュニケーションを図ろうとするのではないかと考えた。また、インプット・アウトプットの仕方を工夫し、基本的な表現に繰り返し触れる機会を増やすことで、簡単な事柄について自分の考えや気持ちを伝えられるようになると考えた。

（２）一年を通して

一年を通して、クラス、担任、５年生など立場の違う相手に伝えることで‘伝えたい’の必然性を高める取組を行った。単元の最初はインプットを中心に、ワークシートや発表の形式を同じにしたり、ICTを活用したりしながら変化を伴う継続を意識することで、‘伝えたい’につながるインプット、アウトプットを行った。

（３）実践について

実際の単元では、「① 場の設定」、「② たくさん聞かせて気付かせるインプットの工夫」、「③ 単元の途中に少人数での発表活動を行う」、「④ 伝えたい素材をテーマにする」ことを意識して実践を行った。① については、三浦市にあった唯一の水族館、油壷マリンパークが閉園を発表したことをきっかけにし、Asahi Animal Park設立を企画し、そこの飼育員としていち押しの生き物を紹介しようという発表の場を設定した。② では、スライドを用いたりゲームをしたりしてたくさんのフレーズを聞く機会を作った。③ では、３人のグループをつくり、カードを使って、ゲーム感覚で話したり聞いたりする活動を取り入れた。チーム全員で達成できたらチームポイントとし、チームポイントを合計したクラスの達成規準を設定することで、全員で課題のクリアを目指すようにするなど、悩んだり、困ったりしている人がいたら声を掛け合う雰囲気づくりを心がけた。④ については、「自分のいちおし」の動物を伝える内容にすることで、調べた動物の意外な一面や、面白さ、こだわりを表現できるようにした。クイズ形式でクラスの反応を受けて答えたり、身振り手振りを交えて習った言葉を使って自分でアレンジしたりする児童の姿が見られた。

単元のスタートから、最終目標を明確にしながら学習を進めることで、単元の前半部分のインプット中心の学習にも前向きに取り組めた。その後のグループ活動では、積極的にアウトプットする子、まだ自信がもてない仲間をサポートする子、周りに支えられ伝えようとする子など様々いる中で、アクティビティを楽しむ様子が見られた。アクティビティの時間を十分確保したことで、各自の発表もスムーズに進めることができた。飼育員・お客さんという立場を設定することで、より‘伝えたい’という意識

をもてた児童が多かった。一人ひとりの‘伝えたい’の気持ちを継続させるためには、あらためて目的・場面の設定の大切さ、十分なインプットの重要性を感じた。

（４）成果と課題

㋐については、「魅力的な世界を紹介する旅行会社の社員」「Asahiアニマルパークの飼育員」「楽しい学校を伝えるトークショーのゲスト」などになるという「場」を設定したことは、子ども達の主体的な学びとなった。新しいUnitになると、どのような‘伝える’「場」が設定されているのかに興味を示す児童も多かった。特に、担任に加えALTや他の先生方に伝える「場」では、先生方を呼び込み伝えようとする姿が見られた。また、５年生に向けて伝える場面では、下の学年の手本となるよう繰り返しチームで伝え方を工夫していた。㋑㋒㋓について、タブレットのスライドや録画機能を活用したり、聞き取ったりやり取りをしたりするアクティビティを用いることでUnitの目標となる伝える活動へつなげることができた。また、ペアやグループで行うアクティビティでは、インプットが十分ではなく、発信することに困り事を示す児童に寄り添い、共に学び合う姿が見られた。よって、課題解決の手立ては有効であったと考えている。

外国語の授業では、相手意識をもちながら、相手（誰か）との関りを中心とした活動を意識して行ってきた。その中で、いつも‘伝えたい’「場」の設定の大切さと同時に難しさを実感させられた。教室の中で、外国語を用いる必然性をもたせる、そして、その気持ちを持続させることにおいて工夫をしてきたが、その都度「場」の設定に苦労した。設定した「場」が、児童全員にとって必然性があったり、興味が持続できるものであったりしたかという点では、これからも指導する側が学び続け、児童の実態、時代のニーズに合わせて変えていく必要があると感じている。そして、児童がいきいきと自分の考えや気持ちを表現できるようになるためには、十分なインプットも不可欠であると考えている。そのため、インプットの手立てとして単なるリピートの学習ではなく、児童の身近な内容でのSmall Talkを充実させたり、多様なアクティビティをさせたりして、児童が他者とコミュニケーションを楽しみながら学べるように手立てを講じていくことが必要であり、今後の課題でもあると考えている。

質疑応答

今回、質疑応答については特になかった。

協議の柱及び協議概要

「‘伝えたい’活動にするための考え方や工夫」について、グループ協議を行った。その後、協議内容については２グループから発表があった。

○‘伝えたい’活動にするために意欲的に反応して聞くことが大切である。アウトプットはインプットを超えない。インプットを大切にしている授業計画の大切さを改めて感じた。中学校１年生では、「発表しなきゃ」の圧力を感じる。小学校で楽しむことが大切である。発表する意味のある課題設定が大切だと感じた。

○単元全体の目的場面の設定を大切にしている。それだけでなく、時間毎の目標を明確にすることも大切である。音から書いたり読んだりするのに抵抗がある。原稿作りの大切さを感じる。「この文が言えれば大丈夫だよ」と子どもが認識できることが大切ではないか。ALTや専科が地区ごとでバラバラの状況なので、汎用的な解答は出しにくい。

まとめ概要

児童・生徒の実態把握とそれに伴う事前の手立ての大切さを再認識した。アンケートを生かして実践を考える。そして単元の途中や単元の切れ目での評価を通した指導改善が大切である。評価とは、評定だけではない。形成的評価と総括的評価がある。形成的評価は学習の目標を明確にし、児童たちがしっかりとそれについて認識する必要がある。目標を把握し、それまでの距離を把握する。距離を縮める方法や手立てを教えてもらいながら児童・生徒たちは自分でも試行錯誤していく。教師はその姿を見て指導改善をする。指導と評価を一体化させながら実践を継続していくことが大切である。

概　要　報　告

実施期日	８月２日(火)
部　会　名	小学校　特別の教科　道徳部会

神奈川県研究主題　主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

テーマ　『思いやりの心をもった子～自己を見つめる授業の工夫～』

提案概要

学習指導要領では、思いやりについて「より良い人間関係を築くうえで求められる基本的姿勢」と書かれており、40回以上「思いやり」という言葉が使われている。また、情報化が進んでいく現代社会の中で情報モラルを育成していくうえで、相手を思いやることは今まで以上に大切である。

しかし、児童にアンケートをとると、以下のことが分かった。

① 「思いやりは大切」ということは知っている。(90%以上)

② 「自分は思いやりがあると思う」「思いやりのある行動が想像できる」「思いやりのある行動をしている」の項目は、「当てはまらない」「あまり当てはまらない」と感じている児童が少なからずいる。(10%程度)

また、教職員の課題意識としては、以下のことが挙げられた。

① 行動の部分に目が向いてしまうことが多かった。

② 教材だけを学習する形になってしまった。

そこで、次のような願いと改善策を講じた。

① 「思いやりの心」をもった児童を育成したい。

・年間指導計画を見直し、各学期１回ずつ親切、思いやりの内容項目を扱う。

② 自己を見つめる時間をもっと確保したい。

・全校共有の手立て表を作成
・自己を見つめる手立ての工夫
・教材を授業時間外に読む・・・宿題、朝活動など
・読み物教材の工夫・・・削る、言葉の変更、分割提示など
・スライドの活用・・・ロイロノートであらすじを共有
・一目でわかる視覚化

③ 価値の具体化をして、実生活につなげたい。

・価値の定義づけ・・・授業スタイルを教師の説話で価値を定義づける帰納法から、子ども自身が自分の行動を価値づける演繹法へと転換

【成果】

自己を見つめる時間を確保したことで、実践的な行動をしっかりと考えることが出来た。高学年でも、思いやりの行動をする児童が増えた。また、教師側としては、ねらいに即して教材を提示することができ、目標を意識した授業づくりができた。

【課題】

導入部分で道徳的価値の定義づけをすることで、実践的な行動を考える時間を確保できたが、定義づけの部分も子どもたちに考えさせるべき授業もあると思うので検討が必要。また、学期に１回思いやりの授業をすると年に３回分の教材が必要になるが教科書には２回分の教材しかないので、どのような教材がよいのか今後も検討が必要。

質疑応答

Ｑ　１年間の見通しをもって、行事や教科との関わりは意識したか

Ａ　行事とのつながりは意識できていなかったが、教科とのつながりは意識した学年もあった。

協議の柱及び協議概要

【協議の柱】自己を見つめる授業の工夫

- 全校共有の手立て
  - ・学校全体で共有することで、子どもに分かりやすく、系統立てにも役立つのではないか。
- 自己を見つめる時間を確保する工夫
  - ① 教材を授業時間外に読む
    - ・考える時間を確保するにはとてもよい。
    - ・家庭で宿題として出来ない児童、宿題を忘れた児童は置いていかれないか。そのような児童が多い場合は、導入で教師が読んでもよいのではないか。
    - ・低学年では、一緒に読んで味わいながら深めていくことも必要ではないか。
  - ② スライドの活用
    - ・そもそも国語的に読めているのかということにこだわると国語科の延長になってしまうので、それを脱却して道徳科の授業に入っていくためには有効である。
    - ・考える時間を確保する手段としても有効である。
    - ・ロイロノートだけではなく、黒板を利用してマグネットなどでも応用可能である。
    - ・スライドに登場人物の気持ちを入れると、考えが教師と違った児童は置いていかれるのではないか。
- 演繹法の授業スタイルについて
  - ・押しつけと教師の指導性のバランスが大切だろう。
  - ・はじめにゴールを出すことで、子どもが何を考えるのか、明確になり、しっかりと考えさせることができる。
  - ・教材によっては、実践的な行動を考えるのに向かないものもあるのではないか。
  - ・様々な背景を抱えている子どもたちの考えにどのように触れていくのか、教師の力量が問われる。
  - ・低学年では、言葉の理解や時間配分などにさらに工夫が必要だと感じた。
  - ・内容項目から投げかけるのは、高学年向きと感じた。低学年は、一緒に味わいながら深める、中学年は自分の経験から考えさせる、と良いのではないだろうか。
  - ・分かっているけれどできない（人間理解）部分も考えさせることができると、さらに深まるのではないか。

まとめ概要

教師はつい帰納的な価値偏重型の授業で安心したいと思ってしまう。一方で、子どもの中に答えがあり、教師の考えに寄らなくて良いという思いももっている。今回の演繹的な指導法では、あえて何でもお膳立てしないことで、子ども個人に返る授業となった。

「自己を見つめる」という活動は、一人ではできない。人との関わりや失敗体験などの出来事を通して、比較することで初めて見えてくる。このような体験を教材として使っても良いのではないだろうか。

また、身近な教材は、確かに子どもたちは考えやすいが、顔や行動が透けて見えてしまう怖さがある。教材をどのように扱うかは教師の裁量であり、ねらいに即して臨機応変に扱えば良い。

学習指導要領に立ち返ると、道徳教育は学校教育全体で行われるものであり、「特別の教科 道徳」はその要として位置づけられている。１時間の授業だけではなく、単元計画、中学校も視野に入れた９年間の見通しが必要になってくるのではないか。

以上のように考えると、「特別の教科 道徳」で育てるべき道徳的判断力、道徳的心情、道徳的実践意欲と態度も急激に変えることはできないし、自分一人では身に付けることもできない。心の種にに少しずつ水をあげていつか花が咲くように、少しずつ時間をかけて育む視点を持つことが大切なのではないだろうか。

概　要　報　告

実施期日	８月２日(火)
部　会　名	小学校　総合的な学習の時間部会

神奈川県研究主題

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善

テーマ

『地域の魅力を発見し、発信しよう』

提案概要

単元目標

「藤沢の地域活性化に取り組む人々と協働して藤沢のまちについて知る活動を通して、藤沢や明治地区の歴史やよさに気付き、これからのまちの在り方について考えるとともに、まちづくりに積極的に関わることができるようにする」この単元目標を達成するために、浮世絵を活用していくこととした。

外部教育資源の活用

学習指導要領では、社会教育施設や社会教育団体等との連携について触れている。学習指導要領との関連を鑑み、外部教育資源の活用に重点を置き、学習を展開することとした。そのために、藤沢に関する歴史や文化を浮世絵から読み取り、藤沢の地域活性化に取り組んでいる人と実際に出会い、地域活性化への取り組みに対する課題を設定した。外部教育資源としては、① 藤澤浮世絵館　② 日本大学生物資源科学部「蔵チーム」③ 明治市民センターがある。

主体的で対話的な学習の実現のために

「教科横断的な学習」、「浮世絵に興味をもたせるための手立て」の２点の工夫をした。まず、社会科の歴史学習から発展させて総合的な学習の時間にどのようにつなげていくかを考えた。最初に江戸時代の歴史学習を通して浮世絵と出会い、それをどう外部資源と繋げていくかを検討する中で、室町文化の学習が生かせると考えた。そのため、室町文化の学習を体験的に行った（① 社会で能の体験　② 国語で狂言　③ 図工で水墨画）。そして、浮世絵に興味をもたせるために、浮世絵クイズを社会科で行った。これらの活動を通して、児童の関心意欲に繋げ、その先の外部教育資源への活動へと繋げることとした。

成果と課題

外部教育資源の活用により、多くの「人・もの・こと」に出会うことができた。中でも、「蔵チーム」と繋がることによって地域活性化へ向けた学習活動へ舵を切ることができた。一方で単元のまとめや、外部に発信する活動が弱かったという課題も残った。今回の学習を通して、教育資源が豊富にあるということを再認識できた。今後も社会教育施設等と継続的な関わりをもち、よりよい活動へとつなげていきたい。

質疑応答

Ｑ：一つの題材をクラスで取り組むとき、興味をもてない子がいる。全員が興味をもつためには？

Ａ：手立てをどう打つか。今回はクイズを用いて面白いと思わせたり、体験学習で文化に興味をもたせたりした。外部人材と繋がることは、最終的なゴールではないが、手立ての一つとして子どもたちを引きつけるものであった。

Ｑ：先生はすごく教材研究しているが、子どもに主体はあるのか？子どもたちが個別に課題設定をして取り組む場面があったか。

Ａ：最後の江ノ島巡りは子どもたちからの発信ではあったが、正直教師主体の活動が多くあった。

Ｑ：テーマにもあるが、子どもたちがどのように発信する姿を見たかったか？

Ａ：コロナ禍であったので難しかったが、外部機関と繋がってポスターの掲示を行った。子どもたちが作成した浮世絵を展示してもらったり、蔵チームと繋がったりして地域のために行えることをやり

たかった。

協議の柱及び協議概要

① 外部教育資源について　～日常的なつながり、どのような教育資源があるか～

「地域の人との関わりが大きい。」「子どもが興味をもったものは全て教育資源となるのではないだろうか。」「市役所の人と繋がることができた。コロナ禍で厳しい部分もあるが、子どもたちのやる気次第で多くの人と繋がることができる。」

② 各市町の総合的な学習（部会）の取り組みについて

～児童の興味関心をどのように生かした学習活動にしているか～

＜鎌　倉＞SDGs推進都市となっている。海辺の掃除や福祉に関することへの取組だけでなく企業との繋がりもあり、着なくなった服を届けるなど学校全体で難民支援に取り組んでいる。児童の興味関心を引き出すために海が近い学校なら海を活用するなど、自分たちも知っている地域の素材を生かしたものにすると、次の学年にも繋がっていくのではないか。

＜茅ヶ崎＞地域の土地を借りて、田植えから稲刈りまで行っている。地域の祭りや工芸品について学ぶ。

＜寒　川＞ある程度学年で取り組むことが決まっており、教科を広げた活動に取り組んでいる。

＜逗　子＞学校数が少ないので、逗子市の４年生担任同士で話し合って取り組むこともある。

＜葉　山＞小中連携の取組をしている。総合的な学習で９年間のカリキュラムを作成中。

＜三　浦＞海洋教育部会と繋がって取り組むこともある。

③ 対話的な活動について　～コロナ禍において工夫していること～

ICTの活用が有効。ただし使えば良いというものではなく、それを使ってどう主体的・対話的にするかが大切である。外部との打ち合わせでもICTを使えて便利だった。同じ市の児童同士をオンラインで繋げ、発信する場とすることもでき、新たな対話的な方法となるのではないか。またICTを使うことで、今までできなかった世界や国内、他の地域との繋がりがもてるのではないだろうか。

まとめ概要

本提案における授業の工夫・改善

本時は地域活性化に向けて努力された授業であった。授業計画をするにあたり、単元目標と単元計画にズレがないようにしていくことが大切。授業の工夫という視点では、浮世絵という学習教材を４年生で扱った方が効果的であり、学区内の良さについて浮世絵を使って発信する活動を４年生で行うことで、総合のゴールが明確になるのではないか。

また、評価の視点では、６年生としてこの目標を達成するためには、指導と評価の一体化を図ることが良い。そのためには、多面的に考えられるような授業の工夫が必要である。思いつき（予想）で述べたことをもってA評価とするのは苦しいので、児童の発言をきっかけに、次時の目標「藤沢に関する浮世絵が多く残されているのは江の島や有名な神社があったからではないか」という問いを立てられたら、より探究的な学習課題になったのではないか。

学習指導要領に基づいた学習評価について

児童生徒にとってどういう力が付いたかを的確に捉えて、学習改善につなげる。総合的な学習の時間の評価の観点は、第一目標を踏まえて、各学校で具体的に定めた目標内容に基づいて三観点に則して学習状況を見取る。一時間単位で全て評価するのではなく、単元のまとまり等、一定程度の時間数で評価する必要がある。総合的な学習の時間を通して資質能力を育てるということができているかというのを見るのが目的であり、成果物の出来栄えをもって総合的な学習の時間の評価とするのは適切ではない。その成果物から、児童がどのように探究の過程を通して学んだかを見取るのが重要である。児童にどのような資質能力が育まれているか、児童は何を学び取っているのかを多様な評価、過程での評価を意識して行い、指導に繋げていくことが大切である。

概　要　報　告

実施期日	８月４日(木)
部　会　名	小学校　特別活動部会

神奈川県研究主題

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

テーマ

『学級活動の各領域のつながりを意識した指導を通した児童の育成』

提案概要

【提案内容の仮説と研究内容】

本提案は、①「話合いの型を作ることで、自分たちで話合い活動ができるであろう。」②「キャリアパスポートの振り返りを行うための手段として活用することで、自己に対する肯定的な評価を促すことができるであろう。」という２つの仮説を検証しつつ、学級活動（１）（２）（３）の各領域の関連性について研究したものである。また、本研究では、学習指導要領における「学級活動（２）についても学級担任の教師による指導が原則であるが、活動の内容によっては、他の教師等の専門性を生かすと効果的である場合も予想される。」という記述にもとづき、学級活動（１）で培った話合い活動の進め方をもとに（２）の内容も同様の形式で進められるという考えのもと、実践を行った。

【学級活動（１）の授業研究】

「お笑いの会がもり上がるために、どんなことをすればよいか」という議題で学級会を行った。お笑いの会を休み時間と授業時間どちらで行うかの話合いになった。実践後の振り返りでは、「事前にどのような形にするかをある程度考えを絞りたい」など、次回以降に向けての自分なりの解決方法について触れる児童が多かった。本学級会を通じて、自分達で司会進行できたことが、児童の大きな満足感につながったと言える。

【学級活動（２）の授業研究】

議題箱に入れられた「だれかの悩み事」をもとに、「ノートをはやく書くにはどうすればいいか」という題材で話合いを行った。題材において様々な場面が考えられ、具体的なイメージがわかなかったのか、最終的に出た意見は少なかったものの、前回までの話合いの課題を意識して臨む姿が見られた。

【学級活動（３）の授業研究】

キャリアパスポートを、自分の良さや頑張ったことを振り返ることができるような形式のものにした。年間を通じて、振り返りの力を高める指導を継続し、その集大成として「キャリアパスポートのふり返りを共有しよう」という題材で授業実践を行った。キャリアパスポートでの振り返りや友達との交流を通じて、未来や過去の自分だけでなく、今のクラスと関わることができ、未来の自分がよりよいものになる可能性を感じた実践であった。

【仮説の検証】

仮説①：学級会の土壌が少ない状態から、自分達で話合いたいことを見つけ、話合えるようになったことや話合いへの前向きな意見を振り返ることができるようになったことなどから、話合いの型があることは、児童の話合い活動に有効であったと考えられる。より丁寧な手立てを示しておくことで、一層活発な話合いになることも見いだせた。

仮説②：振り返りの手段としてキャリアパスポートを活用することで、自己の頑張りへの気付きは増えた。継続して指導を重ねていくことで、児童の記述内容の量にも良い変化が見られた。質的な変化も生み出すためには、他教科とも積極的に関連させていくことが大切であると考えられる。

質疑応答

Q：学級目標について教えて欲しい。

A：「明るい」「人に優しく」「仲良く」「助け合う」の頭文字を取り、「明るいひなた」という目標を、児童とともに作成した。

Q：学級会を行う前に、計画委員会、司会団との事前の準備、打ち合わせなどはどの程度行ったか。
A：計画委員会は立ち上げていない。児童が負担感を持たなくて済むよう、提案した児童から話を聞き、司会団は立候補してもらう人に留めた。

Q：学級会で話合いの視点等がずれてしまったときなどに、いつ、どこまで待って教師が助言するかなどの基準は決めているか。
A：ケースバイケースにはなってしまうが、基本は児童の話合いたいことで進ませてあげたいという思いから、あまり横やりは入れないようにしている。横やりを入れすぎてしまうと、児童の「話合いたい」という意欲を削いでしまうため。

協議の柱及び協議概要

柱Ⅰ「学級活動への年間を通した取組について」
・話合いの形を変えていこうと取組をしているものの、職員間の考え方の相違から一気に変えていくことが難しい。
・各担任のやりたいように学活を扱っているのが正直な現状。
・授業に手一杯で、週に１時間の授業を確保するのが難しいことも多い。
・計画を立てたとしても、なかなか計画通りにいかない。
→ 多くの学校で、担任裁量になってしまうこと、話合いのスキルの積み重ねが難しいことなどが共通の課題として挙がっていた。

柱Ⅱ「キャリアパスポートの各校の現状と有効な活用方法」
・県からの書式をそのまま使ったり、簡単に形式を変更したりして活用している程度。
・正直なところ、「やらなきゃいけないもの」だからやっているもので、「活用している」という感覚は持てていない。
・小学校から中学校に引き継ぐときにどの程度参考にされているのか、目が通されているのか気になる。
→ これについても、有効な活用例は少なかった。導入されたばかりということもあり、今回の提案のような「有効な実践例を知りたい」という意見も多く挙がっていた。

まとめ概要

○ 学級活動では、年間を通したカリキュラム、年間計画の作成が重要であることが明らかになった。ただ話合いの型を作るだけではなく、年間計画に意図的に活動を組み込んでいくことで、年間を通じてつながりをもった話合いの指導につなげていくことができる。それだけでなく、カリキュラムマネジメントの視点から、他教科との関連にもつなげられるだろう。
○ 指導と評価の一体化の視点からも、年間を通じて児童が評価規準を達成できるよう、学期毎に評価規準、目標を作成し、改善していくことで、カリキュラムと評価規準、双方の向上につながっていくといえる。
○ 特別活動の良さは、自分達で物事を決められる喜びと責任感、民主主義が体験的に学べる点にあると考えている。そうした経験とその過程が、自己肯定感の醸成と人間関係形成力の獲得につながっていくはずである。

概　要　報　告

実施期日	８月４日(木)
部　会　名	小学校　特別支援教育部会

神奈川県研究主題

『カリキュラム・マネジメントによる学校教育の改善・充実』

テーマ

『地域の小学校で友だちと共に学ぶ』

～学校看護介助員（看護師）と連携した医療的ケア児の学校生活～

提案概要

医療的ケアが必要な児童を通常の小学校で受け入れるため、学校看護介助員という職を新たに作り、看護師が学校で医療的ケア等を行えるようにし、常に専門職である看護師と連携を取りながら日々教育に当たっている。医療的ケアが必要な児童が安全で安心して学校生活を送ることができること、すべての児童が同じ学校で生活する中でそれぞれが互いに「知ろうとする」関係を作ること、すべての児童が安全で安心できる学校でなければ他者との違いを受け止め受け入れることはできないこと、を大切と考えた。

医療的ケア児童の学校生活を支える教育課程として、学校教育法施行規則第8章特別支援教育第130条「各教科に属する科目の全部又は一部について、合わせて授業を行うことができる。」２「各教科、道徳、外国語活動、特別活動及び自立活動の全部又は一部について、合わせて授業を行うことができる」に則り、特別支援学校の教育課程を参考に、個別指導計画を作成し、自立活動を主とした教育課程を編成した。一つひとつの学習の内容を単独で取り上げるのではなく、それぞれ関連させ全体像として本児童ができるようになる姿を想像した教育課程を編成することを心掛けた。また、教育課程を支える仕組みとして、校内での支援体制、学校看護介助員との連携、他機関との連携を大切にした。

＜成果＞

地域の学校として、本児童にとっては、決まった人や同年代の児童とかかわりあう場、積み重ねによって日常生活動作を学べる場、家庭・学校・地域と生活を区切ることのできる場となりえた。また、他の児童にとっては、知識ではなく存在を通してかかわりあい、より身近に考える経験ができる場となった。

＜課題＞

（１）特別支援学級を担任する教員の確保と専門性

インクルーシブ教育の理念に基づく全児童に向けたかかわりの探求と児童の特性に応じた指導との両立、多職種との協働するためのコーディネーター的役割が求められる。

（２）学校看護介助員の確保

「医療」と「教育」の両方の視点を合わせもつことと、学校で働き、「教育」を加味した「看護」の専門性が確立されることが大切である。

（３）児童への福祉的な支援と進路に向けてのスムーズな連携

「医療的ケア児及びその家族に対する支援に関する法律」が施行されていたが、いまだリソースが不足している。「教育」と「福祉」の連携が必須である。

質疑応答

１、職員数（看護介助員含め）について

→ 児童数23名で、教員６名、学習支援員２名、看護介助員３名いる。

２、看護介助員の勤務形態について

→ 基本的に時給制になっている。

常に３名必要ではないので、早番（８：15～14：15）遅番（10：15～16：15）の体制で勤務していただいている。

３、逗子市の看護介助員配置の経緯について

→ 子どもの安全・安心を第一に職員、保護者とともに委員会に要望した。

現役の看護師にどのような勤務形態であれば勤務しやすいかについて確認した。看護師の方もケアだけではなく、子どもとかかわりたいという思いがあった。

協議の柱及び協議概要

１、多様なニーズに対応した支援教育について

医療的ケアが必要な児童、外国籍の児童などの増加がみられ、ハード面での対応が難しい中で受け入れている現状がある。多様なニーズに対応するためには学校全体として取り組み、環境を整えていく必要がある。また、進学の際に中学校通常級や普通高等学校を希望されることも多いが、児童と保護者の希望が異なることもあるのでより慎重かつ丁寧な対応が必要となる。

２、支援級担任としての課題の共有

交流の目的が曖昧なことがみられるので、目的を明確にすることが大切である。また、小中、他職種、保護者などとの連携をしっかりする必要もある。

まとめ概要

＜提案に対する指導・助言＞

本提案はインクルーシブ教育を推進する神奈川県の支援教育の充実に向けて大変興味深く学びの多い提案であった。2017年告示の学習指導要領において、カリキュラム・マネジメントについて新たに総則にもりこまれ、アクティブ・ラーニングとともに児童生徒に生きる力を育成するという学習指導要領の理念を各学校において実現していくために充実が求められている。

１、組織的かつ計画的に環境を整えていくということの大切さ

児童同士が知ろうとする関係のためには、担任が支援級の児童だけでなく周りを取り巻く児童を知ろうとする姿、分け隔てなく支援をしていく姿がある。横のつながりを大切にして、一つひとつの行動を意味づける言葉がけを積み重ねてこられた成果である。

２、児童の自発的行為を大切にカリキュラム・マネジメントの充実を図った

自発的行為を見逃さずに言語化して行動を意味づけていく姿が現れている。通り一辺倒の指導ではなくアンテナを張って発信を見抜いており、学習指導要領の「児童生徒の姿の把握から学習の成果を的確にとらえ、改善へとつなげていく」ことにあたる。本児童の成長は、このカリキュラム・マネジメントの賜物ではないかと思う。

＜部会の総括＞

個に応じた障害による学習および生活上の困難を改善克服するために、どんな活動が必要なのか頭を悩ませるが、自立活動は特別支援教育の土台・中核となる指導になるので、学校として特別支援学級として考えていくことが大切である。何につまづいていてどういう環境を整えれば、どういう支援をすれば克服できるのか、特別支援教育の根本であるので、その部分について再度PDCAサイクルで見直ししていただきたい。

また、インクルーシブ教育が推進されてから、すべての子どもはできるだけ同じ場でともに学びともに育つという部分だけがクローズアップされ、交流することが目的になってしまい誤解されているのではないか。交流の中にも、通常級の児童の目標、支援級の児童の目標がそれぞれあり、それが達成できたか、指導方法があっているか、児童自身が達成感をもって学習に参加できているかを常に問いていかないといけない。支援級には支援が必要な児童が在籍しており、人手が足りずに難しい部分が多いとは思うが、学校全体として支援がどうであったか、一貫性があったかを検証していく必要性がある。

また、支援が必要な児童については、環境が変わることが不安であったり、特性が顕著に現れたりするので、将来的なことを考えると円滑に引き継いで一人ひとりの特性能力を理解し、能力を生かしてあげられるような引継ぎが必要である。そして、担任や学校が変わっても、適切な指導や必要な支援が受けられるようにするとともに、小学校からきちんと情報を受け取り、中学校の３年間を見通した一貫性のある指導や支援を実践していくことで、支援級の児童、保護者に安心感を抱いてもらえるような学校を作っていただきたい。